

随 想

格好の良い勾玉

宮田 伸樹

勾玉は曲がっているので、曲玉とも書く。バナナの様な形状で一端には穴が開けられている。静岡県登呂遺跡や、三重県の海の博物館で見てから興味を持つ様になった。古代の頸飾りの一つであった。また、三種の神器の一つはヤサカニノマガタマである。

その形は、穴のある方を仮に頭部とし、他端を尾部として、両端をつなぐ間を体部とすると、頭部から体部、尾部までが同じ太さで出来上がっているものが格好が良い。現在、アクセサリーとして作られているものは、頭部が他の部よりも不釣り合いに大きかったり、甚だしいものでは頭部が異常に大きくて、申し訳の様な体部、尾部がくっついている。目のある者が見ると真に不格好である。

古代の勾玉の材料は、ほとんどがヒスイ、または碧玉（岩）であり、他にはガラスくらいである。ヒスイは、新潟県糸魚川市付近で産出したものが良質であり、現在でも河川敷（転石）や海岸（漂石）で発見される。わが国では糸魚川市以外には5、6カ所のヒスイ産地が分かっているが、いずれも質が悪く、収量も少ない。古代の日本全国に分布したのも糸魚川市産である事が判明している。縄文、弥生時代からヒスイの道があって、北海道から発掘されたヒスイ勾玉も糸魚川市産である。一方の碧玉は出雲地方が産地であり、出雲石、青メノウとも呼ばれている。

原石から勾玉を制作する方法を攻玉と言ひ、糸魚川市付近にも、出雲の玉造地方にも攻玉のおおがかりな工房跡が多数発見されている。原石を大体の勾玉の形に割ってから、または磨り切ってから、孔を開ける。孔開けに成功した後にはじめて、砥石で完成品に仕上げたらしく、孔開けの段階での失敗品が多く発見されている。

硬いヒスイや、ヒスイよりはやや柔らかいけれどもメノウに孔をうまく開けるのは古代では至難の技であったのだろう。しかし、メノウでは孔は先細りになっているものもあるが、ヒスイではほとんど平行に開けられていて、先細りや先太りではない。

メノウの孔開けの方法はまだすっかりは分かってはいない。しかし、ヒスイでは分かっている、植物の茎を使用したと考えられている。石粉（砥石で多量に出た）を開けたい部分に置いて、そこに中空の茎（細い竹の一種）を当てて、回転させて、孔を開けた。その根拠として未完成品の不完全な孔の末端にヘソ様の突起が残っている。ただ、孔の貫通の瞬間がもっとも難しかったらしく、貫通時に平面が破砕したものがある。それで、荒造りの段階で孔を開け、それができたものをさらに完成工程に進めたのであろう。

格好のよい勾玉をたくさん見たいと思っている。できれば入手もしたいのだが、現在の勾玉はとっても良品がないのだ。御存じの方がみえたらぜひ御連絡下さい。

(愛知医科大学教授・放射線医学教室)